

【資料紹介】

鎌倉時代刊本『般若心経秘鍵』

高祖撰述書の開版は建長三年（一二五二）の東大寺真言院聖守（一二一九〜九一。醍醐報恩院憲深の付法資、中道上人）に依る『即身成仏義』一帖（※粘葉装）を嚆矢とする。これに影響されたものか、高野山では同五年に『三教指帰』三卷（※卷子本）を始めとし、以後は經典・疏・論等にわたって相い次いで開版され、謂わゆる鎌倉後期の《高野板》刊行の盛況がもたらされた。その中、高野山大学密教文化研究所蔵『般若心経秘鍵』一帖は、刊記はないものの、現在のところ、同時代に高野山で刊行されたことが推定できる唯一の遺品であり、書誌学上でも貴重な資料である。

本書は平成十九年二月に東京・某古書店から購入したものであるが、保存状態は良好とは言えない。本書の書誌は次のとおり。粘葉装で、現在は綴じ目の方から約五ミリメートルの所を糸で綴じる。前後の表紙は色褪せが甚だしく、元の色は分明でないが、或いは焦茶色か。尤も、現在の見た目は殆ど黒色に見える。但し、前後共に後補の貼り付けと考えられる。前表紙の左上隅に長さ一〇・三センチメートル、幅一・八センチメートルの貼り題箋あり、「□（※般）若心経秘鍵」と墨書する。本体は縦二三・五センチメートル、横一四・六センチメートル。但し、版面の本文の上下と外側との間隔がやや狭いので、恐らく綴じ目を除く三方が裁断された可能性がある。本文料紙は厚手の斐混じり楮紙で両面刷り、一面六行、一行原則十七字、総料紙の八枚を二つ折りにするので十六丁（※本文初めが第二丁表）となるが、印刷面は第十四丁裏まで。版面は凡そ縦二〇・七センチメートル、横二二・四センチメートル位か。本文には影響がない程度の虫損がある。本文は白文で、墨書の振りカナ・

送りカナと一部に返り点を加えるが、後述の事情に依って、同筆か否か判断し難い箇所がある。後掲の影印では殆ど判別出来ないが、部分的に返り点・熟語の音引き・送りカナを朱書で加えている。これも墨カナと同時に加えられたものか、判断しづらい。又、前表紙の裏には後筆墨書「主盛誉」の他、角印が朱で二顆捺されているが、印文は判読できない。全体的に元の料紙の色からは相当黒ずんでおり、下部には明らかな染みが残る。本書の現状から推測するに、恐らく水害等に依って泥をかぶったのを、何らかの方法で拭い取ったらしく、印刷された本文の文字や加筆のカナに擦れた形跡が見られる。料紙が変色しているのはその影響と考えられ、三方の裁断や表紙の貼付はその後のことであろう。又、本書の左側から六・八センチメートルの所に、本書自体を縦二つ折りにした折り目がある。何れにせよ、書籍としての保存状態はよろしくない。又、影印からも明らかな様に、印板の文字には所々欠けた部分があり、全くの後印本である。現在は紺色布貼りの帙に納められている。

第十五丁表に、次の加点の墨書奥書がある。

元應元（※一三二九）六 廿九

於高野山寶幢院一點了

□（※頼か）之

更にその次に別筆「於高野山」、その次に室町期と思われる「傳領金剛佛子十範」の加筆があり、これらの上部に昭和十年に書き加えられた京都帝国大学教授清野謙次氏（一八八五～一九五五）の墨書注記がある。更に第十五丁裏から第十六丁表にかけて、後世の「虚空蔵咒」以下八種の真言等の加筆がある。最末の「高野山／龍生院」は、江戸時代には谷上（※高野山上の地域の名、ほぼ現在の高野山高校の敷地に相当する）の一面にあり、江戸後期に纏められた『金剛峯寺諸院家析負輯』二には「開基、相い知り申さず」とし、「元和九年（※一六二二）院領帳に八石龍生院とあり」（『続真言宗全書』三四・二二八頁）と云う。龍生院が本書の最終所蔵寺院であるとするれば、明治以後は廃絶したので本書も流出し、昭和初期頃、何らかの事情で和洋古書の収集家としても知ら

れる清野氏の手に渡ったものと考えられる。

『般若心経秘鍵』は真言宗教学の一端をなす、謂わゆる『十卷章』の一つとしても、古くから祈祷のための読誦用としても知られているが、刊記が確認出来る本は清野氏注記のとおり、現在、お茶の水図書館に所蔵される永和四年（一三七八）快成書・檀那大教が開版したものである（川瀬一馬編『お茶の水図書館蔵 新修成實堂文庫善本書目』、お茶の水図書館、平成四年刊）。『書目』の解説（四四八頁）には高野版とあるが、水原堯栄師『高野板之研究』（森江書店、昭和七年刊）には言及がなく、或いは根来版であるかもしれない。これも図版の写真に依る限り初印本ではなく、且つ一見して密教文化研究所蔵本と同一刊本ではない。又、川瀬一馬編『龍門文庫善本書目』（阪本龍門文庫、昭和五十七年刊）には鎌倉末期刊・南都版という『般若心経秘鍵』一卷を載せる（二一一頁）が、これは一面四行の折本で、主に祈祷等のための読誦に用いられたもの（※俗に『秘鍵経』と称する）。この体裁の経本は以後、各時代に複数の刊本が存在する。

今の本書の刊行時期を決定する要素は、加奥書の元応元年（一二三九）以前であることは確実であるが、この加点のカナ遣いは平安末期から鎌倉時代に用いられた古体のカナと、室町時代以降に用いられた、近世に通ずるカナが混在しており、これも加点の時代性を表わすものと言えよう。頼瑜記『真俗雜記問答抄』十三（※雜記であるから写本に依る調卷の異動があり、水原師は「第二十卷」とする）に載せる「四十三、真宗（※傍注「言イ」書籍摺写料紙并用途（※イ本には「意」事）には「釈論料紙三帖（用途（※イ本には「意」）以下、合計十四部に要する料紙と摺り賃を挙げているが、その中に「秘鍵五枚（二十七文）」と見える（『真言宗全書』三七・二四八頁）。水原師は『高野板之研究』でも『高野板開板目録』三帖一冊一帙（同師、昭和七年刊）の解説でも、この記事を文応元年（一二六〇）の目録とするが、この年記は『真俗雜記』の所々に見える日付を『同記』全体の記述の年次と見たものらしく、『真言宗全書』本ではこの直前に、頼瑜自身が文永元年（一二六四）七月下旬から醍醐寺報恩院でダトの法を始行し、翌年五月に舍利二粒を感得したことを記している（同・二四七頁）ので、

少なくとも文永元年以前とするのが妥当であろう。この後に『秘鍵』の刊本が確認出来るのは、水原師『開板目録』に納める延慶四年（一一〇八）注進の『高野山印板聖教目録』一帖（※写本の複製）で、「秘鍵七丁（※傍注「イ八丁」）／上品（百） 中品（五十） 下品（三十四文）」と記録される。又、元応二年（一一三〇）了性写『教相目録（高野印板経蔵打札）』一帖にも「秘鍵一帖（八丁／三十四文）」とあり。これらに依れば、高野山で法談・論義が盛んになった鎌倉後期には『般若心経秘鍵』が刊行されていたことは疑いなく、後印本であるとは云え、密教文化研究所蔵本がその印本に相当すると思量される。但し、本書には「開悟」を「開語」、「礪石」を「研」（※原文は文字分明ならず）「石」とする、誤刻と見られる箇所があり、永和四年（一一七八）に改めて開版されているのは、これらの訂正の意味もあると考えられる。

次に影印を載せるので不要とも思われるが、写真では分明でない箇所もあるので、以下に訓み下し文を挙げる。これは主に本書に付せられたカナ・返点に依るが、何れも十分ではないので、なるべく加点の趣きを損なわない様に心がけながら、近世来の訓読法をも参照して補った部分がある。漢字は少々の異体字であってもUnicodeの範囲内にとどめ、それ以外の異体字は特に偏や旁を注記した。カナは古体の字は総て現在のカナ文字を用いたが、当時の通例として濁点はないので、濁るべきところは近世様に濁って訓み、振りカナも改めた。但し、カナの音読は「幻影」の「クエンヤウ（※現代では「ゲンヨウ」）、「妄執」の「マウシウ（※「モウジュウ」）等の様に、古いカナ使いを残す例はほぼそのとおりにした。なお、振りカナの片カナは音読、平かなは訓読を区別したもの。本文中の梵字は現代のサンスクリット語からすれば誤りも見られるが、これも原文を尊重して多くそのままとした。

【外題】□（※般）若心経秘鍵

般若心経秘鍵（并序）

遍照金剛撰

文殊の利劍は諸戯を絶つ

覺母の梵文は調御の師なり

☸の眞言を種子と為す

諸教を含蔵せる陀羅尼なり

無邊の生死、何が能く断つ

唯、禪那正思惟のみ有り

尊者の三摩は仁、譲らず

我今讚述す、哀悲を垂れたまえ

夫れ佛法、遙かに非ず、心中にして即ち近し。眞如、外に非ず、身を弃てて何か求めん。迷悟、我に在り。則ち發心すれば即ち到る。明暗、他に非ず。則ち信修すれば忽に證す。哀れなる哉、哀れなる哉、長眠の子。苦しい哉、痛ましき哉、狂酔の人、痛狂は醉わざるを咲い、酷睡は覺者を嘲むける（※朱左訓「あざけるこ。曾て醫

王の藥を訪わずば、何の時にか大日の光を見ん。翳障の輕重、覺悟遲速の機根不同にして、性欲即ち異なるが若きに至つては、遂に使て二教、轍を殊にして、手を金蓮の場に分ち、五乗、鑣をべて、蹄（※左訓「ひづめこ

を幻影の埒に跪つ。其の解毒に隨つて藥を得ること即ち別なり。慈父導子の方、大綱、此れに在り。

大般若波羅蜜多心經と者は、即ち是れ大般若菩薩の真心眞言三摩地法門なり。文は一紙に欠らず、行（※平声濁

点あり）は即ち十四なり。謂う可し、簡（※原文は艸冠、以下同）にして要なり。約にして深し。五蔵の般若は一

句に嘍むで飽かず。七宗の行果は一行に歡むで足らず。觀在薩埵は則ち諸乗の行人を擧げて、度苦涅槃は則ち

諸教の得樂を裹ぐ。五蘊は横に迷境を指し、三佛は豎に悟心を示す。色空と言えば、簡持、手を拍ち、之を境智と

に解き、不生と談ずれば、則ち文殊、顔を絶戲の觀に破る。之を識界と説けば、簡持、手を拍ち、之を境智と

混ずれば、歸一、心に快す。十二因縁は生滅を麟角に（※送りカナ「に」は朱）指す。四諦の法輪は苦空を羊車

に驚かす。況や復、𑖀𑖀の二字は諸蔵の行果を呑み、𑖀𑖀の兩言は顯蜜の法教を孕めり。一一聲字は歴劫の談

にも盡きず。一一名實、塵滴の佛に極むること無し。是の故に、誦持講供すれば、則ち苦を抜き樂を與う。修

習ジュウ思惟すれば、則ち道を得、通を起おこす。甚深の稱、誠に宜く然かる可し。余、教童の次いでに、聊いささか綱要を撮とつて彼の五分を釋す。釋家、多と雖も、未だ此の幽イウを釣つらず。翻譯ホンヤクの同異、顯密の差別、並びに後に釋するが如し。或るひと問うて云わく、般若は第二未了の教なり、何ぞ能く三顯の經を吞まむ。如來の說法は一字に五乗の義を含み、一念に三藏の法を説きたまう。何かに況わんや、一部一品に何ぞ置としく、何ぞ無からむ。龜卦クイ文著、萬象を含むで盡くすこと無く、帝網聲論、諸義を吞のむで窮きまらず。難ナ者の曰く、若し然らば、前來の法匠シヨウ、何ぞ斯の言を吐かざる。答う、聖人の藥を投ぐこと、機シの深淺シンセンに隨つて、賢者の説黙、時を待ち人を待つ。吾れ、未だ知らず、蓋けし言う可きを言わざるか、言うまじければ言わざるか、言うまじきを之を言えらん。失とが、智人、斷ことわれ而已み。

佛說摩訶般若波羅蜜多心經と者は、此の題額ダイガクに就いて二の別有り。梵漢別なるが故に。今謂わく、佛說摩訶般若波羅蜜多心經と者は、胡漢雜まじえ擧あげたり。説心經の三字は漢名なり。餘の九字は胡号※朱傍注「號イ」なり。

若し具さなる梵名ならば、

𑖀𑖄𑖡𑖩𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮𑖯𑖰𑖱𑖲𑖳𑖴𑖵𑖶𑖷𑖸𑖹𑖺𑖻𑖼𑖽𑖾𑗀𑖿𑗁𑗂𑗃𑗄𑗅𑗆𑗇𑗈𑗉𑗊𑗋𑗌𑗍𑗎𑗏𑗐𑗑𑗒𑗓𑗔𑗕𑗖𑗗𑗘𑗙𑗚𑗛𑗜𑗝𑗞𑗟𑗠𑗡𑗢𑗣𑗤𑗥𑗦𑗧𑗨𑗩𑗪𑗫𑗬𑗭𑗮𑗯𑗰𑗱𑗲𑗳𑗴𑗵𑗶𑗷𑗸𑗹𑗺𑗻𑗼𑗽𑗾𑗿𑘀𑘁𑘂𑘃𑘄𑘅𑘆𑘇𑘈𑘉𑘊𑘋𑘌𑘍𑘎𑘏𑘐𑘑𑘒𑘓𑘔𑘕𑘖𑘗𑘘𑘙𑘚𑘛𑘜𑘝𑘞𑘟𑘠𑘡𑘢𑘣𑘤𑘥𑘦𑘧𑘨𑘩𑘪𑘫𑘬𑘭𑘮𑘯𑘰𑘱𑘲𑘳𑘴𑘵𑘶𑘷𑘸𑘹𑘺𑘻𑘼𑘽𑘾𑘿𑙀𑙁𑙂𑙃𑙄𑙅𑙆𑙇𑙈𑙉𑙊𑙋𑙌𑙍𑙎𑙏𑙐𑙑𑙒𑙓𑙔𑙕𑙖𑙗𑙘𑙙𑙚𑙛𑙜𑙝𑙞𑙟𑙠𑙡𑙢𑙣𑙤𑙥𑙦𑙧𑙨𑙩𑙪𑙫𑙬𑙭𑙮𑙯𑙰𑙱𑙲𑙳𑙴𑙵𑙶𑙷𑙸𑙹𑙺𑙻𑙼𑙽𑙾𑙿𑚀𑚁𑚂𑚃𑚄𑚅𑚆𑚇𑚈𑚉𑚊𑚋𑚌𑚍𑚎𑚏𑚐𑚑𑚒𑚓𑚔𑚕𑚖𑚗𑚘𑚙𑚚𑚛𑚜𑚝𑚞𑚟𑚠𑚡𑚢𑚣𑚤𑚥𑚦𑚧𑚨𑚩𑚪𑚫𑚬𑚭𑚮𑚯𑚰𑚱𑚲𑚳𑚴𑚵𑚷𑚶𑚸𑚹𑚺𑚻𑚼𑚽𑚾𑚿𑛀𑛁𑛂𑛃𑛄𑛅𑛆𑛇𑛈𑛉𑛊𑛋𑛌𑛍𑛎𑛏𑛐𑛑𑛒𑛓𑛔𑛕𑛖𑛗𑛘𑛙𑛚𑛛𑛜𑛝𑛞𑛟𑛠𑛡𑛢𑛣𑛤𑛥𑛦𑛧𑛨𑛩𑛪𑛫𑛬𑛭𑛮𑛯𑛰𑛱𑛲𑛳𑛴𑛵𑛶𑛷𑛸𑛹𑛺𑛻𑛼𑛽𑛾𑛿𑜀𑜁𑜂𑜃𑜄𑜅𑜆𑜇𑜈𑜉𑜊𑜋𑜌𑜍𑜎𑜏𑜐𑜑𑜒𑜓𑜔𑜕𑜖𑜗𑜘𑜙𑜚𑜛𑜜𑜝𑜞𑜟𑜠𑜡𑜢𑜣𑜤𑜥𑜦𑜧𑜨𑜩𑜪𑜫𑜬𑜭𑜮𑜯𑜰𑜱𑜲𑜳𑜴𑜵𑜶𑜷𑜸𑜹𑜺𑜻𑜼𑜽𑜾𑜿𑝀𑝁𑝂𑝃𑝄𑝅𑝆𑝇𑝈𑝉𑝊𑝋𑝌𑝍𑝎𑝏𑝐𑝑𑝒𑝓𑝔𑝕𑝖𑝗𑝘𑝙𑝚𑝛𑝜𑝝𑝞𑝟𑝠𑝡𑝢𑝣𑝤𑝥𑝦𑝧𑝨𑝩𑝪𑝫𑝬𑝭𑝮𑝯𑝰𑝱𑝲𑝳𑝴𑝵𑝶𑝷𑝸𑝹𑝺𑝻𑝼𑝽𑝾𑝿𑞀𑞁𑞂𑞃𑞄𑞅𑞆𑞇𑞈𑞉𑞊𑞋𑞌𑞍𑞎𑞏𑞐𑞑𑞒𑞓𑞔𑞕𑞖𑞗𑞘𑞙𑞚𑞛𑞜𑞝𑞞𑞟𑞠𑞡𑞢𑞣𑞤𑞥𑞦𑞧𑞨𑞩𑞪𑞫𑞬𑞭𑞮𑞯𑞰𑞱𑞲𑞳𑞴𑞵𑞶𑞷𑞸𑞹𑞺𑞻𑞼𑞽𑞾𑞿𑟀𑟁𑟂𑟃𑟄𑟅𑟆𑟇𑟈𑟉𑟊𑟋𑟌𑟍𑟎𑟏𑟐𑟑𑟒𑟓𑟔𑟕𑟖𑟗𑟘𑟙𑟚𑟛𑟜𑟝𑟞𑟟𑟠𑟡𑟢𑟣𑟤𑟥𑟦𑟧𑟨𑟩𑟪𑟫𑟬𑟭𑟮𑟯𑟰𑟱𑟲𑟳𑟴𑟵𑟶𑟷𑟸𑟹𑟺𑟻𑟼𑟽𑟾𑟿𑠀𑠁𑠂𑠃𑠄𑠅𑠆𑠇𑠈𑠉𑠊𑠋𑠌𑠍𑠎𑠏𑠐𑠑𑠒𑠓𑠔𑠕𑠖𑠗𑠘𑠙𑠚𑠛𑠜𑠝𑠞𑠟𑠠𑠡𑠢𑠣𑠤𑠥𑠦𑠧𑠨𑠩𑠪𑠫𑠬𑠭𑠮𑠯𑠰𑠱𑠲𑠳𑠴𑠵𑠶𑠷𑠸𑠺𑠹𑠻𑠼𑠽𑠾𑠿𑡀𑡁𑡂𑡃𑡄𑡅𑡆𑡇𑡈𑡉𑡊𑡋𑡌𑡍𑡎𑡏𑡐𑡑𑡒𑡓𑡔𑡕𑡖𑡗𑡘𑡙𑡚𑡛𑡜𑡝𑡞𑡟𑡠𑡡𑡢𑡣𑡤𑡥𑡦𑡧𑡨𑡩𑡪𑡫𑡬𑡭𑡮𑡯𑡰𑡱𑡲𑡳𑡴𑡵𑡶𑡷𑡸𑡹𑡺𑡻𑡼𑡽𑡾𑡿𑢀𑢁𑢂𑢃𑢄𑢅𑢆𑢇𑢈𑢉𑢊𑢋𑢌𑢍𑢎𑢏𑢐𑢑𑢒𑢓𑢔𑢕𑢖𑢗𑢘𑢙𑢚𑢛𑢜𑢝𑢞𑢟𑢠𑢡𑢢𑢣𑢤𑢥𑢦𑢧𑢨𑢩𑢪𑢫𑢬𑢭𑢮𑢯𑢰𑢱𑢲𑢳𑢴𑢵𑢶𑢷𑢸𑢹𑢺𑢻𑢼𑢽𑢾𑢿𑣀𑣁𑣂𑣃𑣄𑣅𑣆𑣇𑣈𑣉𑣊𑣋𑣌𑣍𑣎𑣏𑣐𑣑𑣒𑣓𑣔𑣕𑣖𑣗𑣘𑣙𑣚𑣛𑣜𑣝𑣞𑣟𑣠𑣡𑣢𑣣𑣤𑣥𑣦𑣧𑣨𑣩𑣪𑣫𑣬𑣭𑣮𑣯𑣰𑣱𑣲𑣳𑣴𑣵𑣶𑣷𑣸𑣹𑣺𑣻𑣼𑣽𑣾𑣿𑤀𑤁𑤂𑤃𑤄𑤅𑤆𑤇𑤈𑤉𑤊𑤋𑤌𑤍𑤎𑤏𑤐𑤑𑤒𑤓𑤔𑤕𑤖𑤗𑤘𑤙𑤚𑤛𑤜𑤝𑤞𑤟𑤠𑤡𑤢𑤣𑤤𑤥𑤦𑤧𑤨𑤩𑤪𑤫𑤬𑤭𑤮𑤯𑤰𑤱𑤲𑤳𑤴𑤵𑤶𑤷𑤸𑤹𑤺𑤻𑤼𑤽𑤾𑤿𑥀𑥁𑥂𑥃𑥄𑥅𑥆𑥇𑥈𑥉𑥊𑥋𑥌𑥍𑥎𑥏𑥐𑥑𑥒𑥓𑥔𑥕𑥖𑥗𑥘𑥙𑥚𑥛𑥜𑥝𑥞𑥟𑥠𑥡𑥢𑥣𑥤𑥥𑥦𑥧𑥨𑥩𑥪𑥫𑥬𑥭𑥮𑥯𑥰𑥱𑥲𑥳𑥴𑥵𑥶𑥷𑥸𑥹𑥺𑥻𑥼𑥽𑥾𑥿𑦀𑦁𑦂𑦃𑦄𑦅𑦆𑦇𑦈𑦉𑦊𑦋𑦌𑦍𑦎𑦏𑦐𑦑𑦒𑦓𑦔𑦕𑦖𑦗𑦘𑦙𑦚𑦛𑦜𑦝𑦞𑦟𑦠𑦡𑦢𑦣𑦤𑦥𑦦𑦧𑦨𑦩𑦪𑦫𑦬𑦭𑦮𑦯𑦰𑦱𑦲𑦳𑦴𑦵𑦶𑦷𑦸𑦹𑦺𑦻𑦼𑦽𑦾𑦿𑧀𑧁𑧂𑧃𑧄𑧅𑧆𑧇𑧈𑧉𑧊𑧋𑧌𑧍𑧎𑧏𑧐𑧑𑧒𑧓𑧔𑧕𑧖𑧗𑧘𑧙𑧚𑧛𑧜𑧝𑧞𑧟𑧠𑧡𑧢𑧣𑧤𑧥𑧦𑧧𑧨𑧩𑧪𑧫𑧬𑧭𑧮𑧯𑧰𑧱𑧲𑧳𑧴𑧵𑧶𑧷𑧸𑧹𑧺𑧻𑧼𑧽𑧾𑧿𑨀𑨁𑨂𑨃𑨄𑨅𑨆𑨇𑨈𑨉𑨊𑨋𑨌𑨍𑨎𑨏𑨐𑨑𑨒𑨓𑨔𑨕𑨖𑨗𑨘𑨙𑨚𑨛𑨜𑨝𑨞𑨟𑨠𑨡𑨢𑨣𑨤𑨥𑨦𑨧𑨨𑨩𑨪𑨫𑨬𑨭𑨮𑨯𑨰𑨱𑨲𑨳𑨴𑨵𑨶𑨷𑨸𑨹𑨺𑨻𑨼𑨽𑨾𑨿𑩀𑩁𑩂𑩃𑩄𑩅𑩆𑩇𑩈𑩉𑩊𑩋𑩌𑩍𑩎𑩏𑩐𑩑𑩒𑩓𑩔𑩕𑩖𑩗𑩘𑩙𑩚𑩛𑩜𑩝𑩞𑩟𑩠𑩡𑩢𑩣𑩤𑩥𑩦𑩧𑩨𑩩𑩪𑩫𑩬𑩭𑩮𑩯𑩰𑩱𑩲𑩳𑩴𑩵𑩶𑩷𑩸𑩹𑩺𑩻𑩼𑩽𑩾𑩿𑪀𑪁𑪂𑪃𑪄𑪅𑪆𑪇𑪈𑪉𑪊𑪋𑪌𑪍𑪎𑪏𑪐𑪑𑪒𑪓𑪔𑪕𑪖𑪗𑪘𑪙𑪚𑪛𑪜𑪝𑪞𑪟𑪠𑪡𑪢𑪣𑪤𑪥𑪦𑪧𑪨𑪩𑪪𑪫𑪬𑪭𑪮𑪯𑪰𑪱𑪲𑪳𑪴𑪵𑪶𑪷𑪸𑪹𑪺𑪻𑪼𑪽𑪾𑪿𑫀𑫁𑫂𑫃𑫄𑫅𑫆𑫇𑫈𑫉𑫊𑫋𑫌𑫍𑫎𑫏𑫐𑫑𑫒𑫓𑫔𑫕𑫖𑫗𑫘𑫙𑫚𑫛𑫜𑫝𑫞𑫟𑫠𑫡𑫢𑫣𑫤𑫥𑫦𑫧𑫨𑫩𑫪𑫫𑫬𑫭𑫮𑫯𑫰𑫱𑫲𑫳𑫴𑫵𑫶𑫷𑫸𑫹𑫺𑫻𑫼𑫽𑫾𑫿𑬀𑬁𑬂𑬃𑬄𑬅𑬆𑬇𑬈𑬉𑬊𑬋𑬌𑬍𑬎𑬏𑬐𑬑𑬒𑬓𑬔𑬕𑬖𑬗𑬘𑬙𑬚𑬛𑬜𑬝𑬞𑬟𑬠𑬡𑬢𑬣𑬤𑬥𑬦𑬧𑬨𑬩𑬪𑬫𑬬𑬭𑬮𑬯𑬰𑬱𑬲𑬳𑬴𑬵𑬶𑬷𑬸𑬹𑬺𑬻𑬼𑬽𑬾𑬿𑭀𑭁𑭂𑭃𑭄𑭅𑭆𑭇𑭈𑭉𑭊𑭋𑭌𑭍𑭎𑭏𑭐𑭑𑭒𑭓𑭔𑭕𑭖𑭗𑭘𑭙𑭚𑭛𑭜𑭝𑭞𑭟𑭠𑭡𑭢𑭣𑭤𑭥𑭦𑭧𑭨𑭩𑭪𑭫𑭬𑭭𑭮𑭯𑭰𑭱𑭲𑭳𑭴𑭵𑭶𑭷𑭸𑭹𑭺𑭻𑭼𑭽𑭾𑭿𑮀𑮁𑮂𑮃𑮄𑮅𑮆𑮇𑮈𑮉𑮊𑮋𑮌𑮍𑮎𑮏𑮐𑮑𑮒𑮓𑮔𑮕𑮖𑮗𑮘𑮙𑮚𑮛𑮜𑮝𑮞𑮟𑮠𑮡𑮢𑮣𑮤𑮥𑮦𑮧𑮨𑮩𑮪𑮫𑮬𑮭𑮮𑮯𑮰𑮱𑮲𑮳𑮴𑮵𑮶𑮷𑮸𑮹𑮺𑮻𑮼𑮽𑮾𑮿𑯀𑯁𑯂𑯃𑯄𑯅𑯆𑯇𑯈𑯉𑯊𑯋𑯌𑯍𑯎𑯏𑯐𑯑𑯒𑯓𑯔𑯕𑯖𑯗𑯘𑯙𑯚𑯛𑯜𑯝𑯞𑯟𑯠𑯡𑯢𑯣𑯤𑯥𑯦𑯧𑯨𑯩𑯪𑯫𑯬𑯭𑯮𑯯𑯰𑯱𑯲𑯳𑯴𑯵𑯶𑯷𑯸𑯹𑯺𑯻𑯼𑯽𑯾𑯿𑰀𑰁𑰂𑰃𑰄𑰅𑰆𑰇𑰈𑰉𑰊𑰋𑰌𑰍𑰎𑰏𑰐𑰑𑰒𑰓𑰔𑰕𑰖𑰗𑰘𑰙𑰚𑰛𑰜𑰝𑰞𑰟𑰠𑰡𑰢𑰣𑰤𑰥𑰦𑰧𑰨𑰩𑰪𑰫𑰬𑰭𑰮𑰯𑰰𑰱𑰲𑰳𑰴𑰵𑰶𑰷𑰸𑰹𑰺𑰻𑰼𑰽𑰾𑰿𑱀𑱁𑱂𑱃𑱄𑱅𑱆𑱇𑱈𑱉𑱊𑱋𑱌𑱍𑱎𑱏𑱐𑱑𑱒𑱓𑱔𑱕𑱖𑱗𑱘𑱙𑱚𑱛𑱜𑱝𑱞𑱟𑱠𑱡𑱢𑱣𑱤𑱥𑱦𑱧𑱨𑱩𑱪𑱫𑱬𑱭𑱮𑱯𑱰𑱱𑱲𑱳𑱴𑱵𑱶𑱷𑱸𑱹𑱺𑱻𑱼𑱽𑱾𑱿𑲀𑲁𑲂𑲃𑲄𑲅𑲆𑲇𑲈𑲉𑲊𑲋𑲌𑲍𑲎𑲏𑲐𑲑𑲒𑲓𑲔𑲕𑲖𑲗𑲘𑲙𑲚𑲛𑲜𑲝𑲞𑲟𑲠𑲡𑲢𑲣𑲤𑲥𑲦𑲧𑲨𑲩𑲪𑲫𑲬𑲭𑲮𑲯𑲰𑲱𑲲𑲳𑲴𑲵𑲶𑲷𑲸𑲹𑲺𑲻𑲼𑲽𑲾𑲿𑳀𑳁𑳂𑳃𑳄𑳅𑳆𑳇𑳈𑳉𑳊𑳋𑳌𑳍𑳎𑳏𑳐𑳑𑳒𑳓𑳔𑳕𑳖𑳗𑳘𑳙𑳚𑳛𑳜𑳝𑳞𑳟𑳠𑳡𑳢𑳣𑳤𑳥𑳦𑳧𑳨𑳩𑳪𑳫𑳬𑳭𑳮𑳯𑳰𑳱𑳲𑳳𑳴𑳵𑳶𑳷𑳸𑳹𑳺𑳻𑳼𑳽𑳾𑳿𑴀𑴁𑴂𑴃𑴄𑴅𑴆𑴇𑴈𑴉𑴊𑴋𑴌𑴍𑴎𑴏𑴐𑴑𑴒𑴓𑴔𑴕𑴖𑴗𑴘𑴙𑴚𑴛𑴜𑴝𑴞𑴟𑴠𑴡𑴢𑴣𑴤𑴥𑴦𑴧𑴨𑴩𑴪𑴫𑴬𑴭𑴮𑴯𑴰𑴱𑴲𑴳𑴴𑴵𑴶𑴷𑴸𑴹𑴺𑴻𑴼𑴽𑴾𑴿𑵀𑵁𑵂𑵃𑵄𑵅𑵆𑵇𑵈𑵉𑵊𑵋𑵌𑵍𑵎𑵏𑵐𑵑𑵒𑵓𑵔𑵕𑵖𑵗𑵘𑵙𑵚𑵛𑵜𑵝𑵞𑵟𑵠𑵡𑵢𑵣𑵤𑵥𑵦𑵧𑵨𑵩𑵪𑵫𑵬𑵭𑵮𑵯𑵰𑵱𑵲𑵳𑵴𑵵𑵶𑵷𑵸𑵹𑵺𑵻𑵼𑵽𑵾𑵿𑶀𑶁𑶂𑶃𑶄𑶅𑶆𑶇𑶈𑶉𑶊𑶋𑶌𑶍𑶎𑶏𑶐𑶑𑶒𑶓𑶔𑶕𑶖𑶗𑶘𑶙𑶚𑶛𑶜𑶝𑶞𑶟𑶠𑶡𑶢𑶣𑶤𑶥𑶦𑶧𑶨𑶩𑶪𑶫𑶬𑶭𑶮𑶯𑶰𑶱𑶲𑶳𑶴𑶵𑶶𑶷𑶸𑶹𑶺𑶻𑶼𑶽𑶾𑶿𑷀𑷁𑷂𑷃𑷄𑷅𑷆𑷇𑷈𑷉𑷊𑷋𑷌𑷍𑷎𑷏𑷐𑷑𑷒𑷓𑷔𑷕𑷖𑷗𑷘𑷙𑷚𑷛𑷜𑷝𑷞𑷟𑷠𑷡𑷢𑷣𑷤𑷥𑷦𑷧𑷨𑷩𑷪𑷫𑷬𑷭𑷮𑷯𑷰𑷱𑷲𑷳𑷴𑷵𑷶𑷷𑷸𑷹𑷺𑷻𑷼𑷽𑷾𑷿𑸀𑸁𑸂𑸃𑸄𑸅𑸆𑸇𑸈𑸉𑸊𑸋𑸌𑸍𑸎𑸏𑸐𑸑𑸒𑸓𑸔𑸕𑸖𑸗𑸘𑸙𑸚𑸛𑸜𑸝𑸞𑸟𑸠𑸡𑸢𑸣𑸤𑸥𑸦𑸧𑸨𑸩𑸪𑸫𑸬𑸭𑸮𑸯𑸰𑸱𑸲𑸳𑸴𑸵𑸶𑸷𑸸𑸹𑸺𑸻𑸼𑸽𑸾𑸿𑹀𑹁𑹂𑹃𑹄𑹅𑹆𑹇𑹈𑹉𑹊𑹋𑹌𑹍𑹎𑹏𑹐𑹑𑹒𑹓𑹔𑹕𑹖𑹗𑹘𑹙𑹚𑹛𑹜𑹝𑹞𑹟𑹠𑹡𑹢𑹣𑹤𑹥𑹦𑹧𑹨𑹩𑹪𑹫𑹬𑹭𑹮𑹯𑹰𑹱𑹲𑹳𑹴𑹵𑹶𑹷𑹸𑹹𑹺𑹻𑹼𑹽𑹾𑹿𑺀𑺁𑺂𑺃𑺄𑺅𑺆𑺇𑺈𑺉𑺊𑺋𑺌𑺍𑺎𑺏𑺐𑺑𑺒𑺓𑺔𑺕𑺖𑺗𑺘𑺙𑺚𑺛𑺜𑺝𑺞𑺟𑺠𑺡𑺢𑺣𑺤𑺥𑺦𑺧𑺨𑺩𑺪𑺫𑺬𑺭𑺮𑺯𑺰𑺱𑺲𑺳𑺴𑺵𑺶𑺷𑺸𑺹𑺺𑺻𑺼𑺽𑺾𑺿𑻀𑻁𑻂𑻃𑻄𑻅𑻆𑻇𑻈𑻉𑻊𑻋𑻌𑻍𑻎𑻏𑻐𑻑𑻒𑻓𑻔𑻕𑻖𑻗𑻘𑻙𑻚𑻛𑻜𑻝𑻞𑻟𑻠𑻡𑻢𑻣𑻤𑻥𑻦𑻧𑻨𑻩𑻪𑻫𑻬𑻭𑻮𑻯𑻰𑻱𑻲𑻳𑻴𑻵𑻶𑻷𑻸𑻹𑻺𑻻𑻼𑻽𑻾𑻿𑼀𑼁𑼂𑼃𑼄𑼅𑼆𑼇𑼈𑼉𑼊𑼋𑼌𑼍𑼎𑼏𑼐𑼑𑼒𑼓𑼔𑼕𑼖𑼗𑼘𑼙𑼚𑼛𑼜𑼝𑼞𑼟𑼠𑼡𑼢𑼣𑼤𑼥𑼦𑼧𑼨𑼩𑼪𑼫𑼬𑼭𑼮𑼯𑼰𑼱𑼲𑼳𑼴𑼵𑼶𑼷𑼸𑼹𑼺𑼻𑼼𑼽𑼾𑼿𑽀𑽁𑽂𑽃𑽄𑽅𑽆𑽇𑽈𑽉𑽊𑽋𑽌𑽍𑽎𑽏𑽐𑽑𑽒𑽓𑽔𑽕𑽖𑽗𑽘𑽙𑽚𑽛𑽜𑽝𑽞𑽟𑽠𑽡𑽢𑽣𑽤𑽥𑽦𑽧𑽨𑽩𑽪𑽫𑽬𑽭𑽮𑽯𑽰𑽱𑽲𑽳𑽴𑽵𑽶𑽷𑽸𑽹𑽺𑽻𑽼𑽽𑽾𑽿𑾀𑾁𑾂𑾃𑾄𑾅𑾆𑾇𑾈𑾉𑾊𑾋𑾌𑾍𑾎𑾏𑾐𑾑𑾒𑾓𑾔𑾕𑾖𑾗𑾘𑾙𑾚𑾛𑾜𑾝𑾞𑾟𑾠𑾡𑾢𑾣𑾤𑾥𑾦𑾧𑾨𑾩𑾪𑾫𑾬𑾭𑾮𑾯𑾰𑾱𑾲𑾳𑾴𑾵𑾶𑾷𑾸𑾹𑾺𑾻𑾼𑾽𑾾𑾿𑿀𑿁𑿂𑿃𑿄𑿅𑿆𑿇𑿈𑿉𑿊𑿋𑿌𑿍𑿎𑿏𑿐𑿑𑿒𑿓𑿔𑿕𑿖𑿗𑿘𑿙𑿚𑿛𑿜𑿝𑿞𑿟𑿠𑿡𑿢𑿣𑿤𑿥𑿦𑿧𑿨𑿩𑿪𑿫𑿬𑿭𑿮𑿯𑿰𑿱𑿲𑿳𑿴𑿵𑿶𑿷𑿸𑿹𑿺𑿻𑿼𑿽𑿾𑿿𑀀𑀁𑀂𑀃𑀄𑀅𑀆𑀇𑀈𑀉𑀊𑀋𑀌𑀍𑀎𑀏𑀐𑀑𑀒𑀓𑀔𑀕𑀖𑀗𑀘𑀙𑀚𑀛𑀜𑀝𑀞𑀟𑀠𑀡𑀢𑀣𑀤𑀥𑀦𑀧𑀨𑀩𑀪𑀫𑀬𑀭𑀮𑀯𑀰𑀱𑀲𑀳𑀴𑀵𑀶𑀷𑀸𑀹𑀺𑀻𑀼𑀽𑀾𑀿𑁀𑁁𑁂𑁃𑁄𑁅𑁆𑁇𑁈𑁉𑁊𑁋𑁌𑁍𑁎𑁏𑁐𑁑𑁒𑁓𑁔𑁕𑁖𑁗𑁘𑁙𑁚𑁛𑁜𑁝𑁞𑁟𑁠𑁡𑁢𑁣𑁤𑁥𑁦𑁧𑁨𑁩𑁪𑁫𑁬𑁭𑁮𑁯𑁰𑁱𑁲𑁳𑁴𑁵𑁶𑁷𑁸𑁹𑁺𑁻𑁼𑁽𑁾𑁿𑂀𑂁𑂂𑂃𑂄𑂅𑂆𑂇𑂈𑂉𑂊𑂋𑂌𑂍𑂎𑂏𑂐𑂑𑂒𑂓𑂔𑂕𑂖𑂗𑂘𑂙𑂚𑂛𑂜𑂝𑂞𑂟𑂠𑂡𑂢𑂣𑂤𑂥𑂦𑂧𑂨𑂩𑂪𑂫𑂬𑂭𑂮𑂯𑂰𑂱𑂲𑂳𑂴𑂵𑂶𑂷𑂸𑂺𑂹𑂻𑂼𑂽𑂾𑂿𑃀𑃁𑃂𑃃𑃄𑃅𑃆𑃇𑃈𑃉𑃊𑃋𑃌𑃍𑃎𑃏𑃐𑃑𑃒𑃓𑃔𑃕𑃖𑃗𑃘𑃙𑃚𑃛𑃜𑃝𑃞𑃟𑃠𑃡𑃢𑃣𑃤𑃥𑃦𑃧𑃨𑃩𑃪𑃫𑃬𑃭𑃮𑃯𑃰𑃱𑃲𑃳𑃴𑃵𑃶𑃷𑃸𑃹𑃺𑃻𑃼𑃽𑃾𑃿𑄀𑄁𑄂𑄃𑄄

たり。又、法月及び般若兩三藏の翻には、並びに序分流通有り。又、陀羅尼集經の第三卷に此の眞言法を説くに、經の題、羅什と同なり。般若心と言ふ者、此の菩薩に身心等の陀羅尼有り、是の經の眞言は即ち大心呪なり。此の心眞言に依つて、般若心の名を得。或るひとの（※朱左送りカナ「あ」るが）云わく、大般若經の心要を略出せる故に心と名づく、是れ別會の説にあらず（云云）。所謂、龍に蛇の鱗の有るが如し。此の經に摠じて五分有り。第一に人法摠通分、觀自在より度一切苦厄に至るまで、是れなり。第二に分別諸乘分、色不異空より無所得故に至るまで、是れなり。第三に行人得益分、菩提薩埵より三藐（※原文は旁を「狼」に作る）三菩提に至るまで、是れ也。第四に摠歸持明分、故知般若より眞實不虛に至るまで、是れ也。第五に秘藏眞言分、**ハヤハヤ**より**サハ**に至るまで、是れ也。第一の人法摠通分に五つ有り、因行證入時、是れ也。觀自在と言ふは能行の人。即ち此の人は本覺の菩提を因と爲。深般若は能所の觀法。即ち是れ行なり。照空は則ち能證智、度苦は則ち所得果、果は即ち入なり。彼の教に依る人、智無量なり。智の差別に依つて、時亦多し。三生三劫六十百妄執差別、是れを時と名づく。頌に曰く、

觀人、智慧を修して　深く五衆の空を照らす　歷劫修念の者　煩を離れて一心に通ず

第二の分別諸乘分に亦五つあり。建絶相二一、是れ也。初めに建と者は、所謂、建立如來の三摩地門、是れなり。色不異空より亦復如是に至るまで、是れ也。建立如來は即ち普賢菩薩の秘号なり。普賢圓の因は圓融の三法を以つて宗と爲。故に以つて之を名づく。又、是れ一切如來菩提心行願の身なり。頌に曰く、

色空、本より不二なり　事理、元より來同なり　無礙にして三種を融ず　金水の喩え、其の宗なり

二に絶と者は、所謂、無戲論如來三摩地門、是れ也。是れ諸法空相より不増不減に至るまで是れなり。無戲論如來と言ふは、即ち文殊菩薩の密号なり。文殊の利劍（※原文は部首を「刃」は能く八不を揮つて、彼の妄執の心を絶つ。是の故に以つて名づく。頌に曰く、

八不に（※送りカナ朱）諸戲を絶つ　文殊は是れ彼の人なり　獨空畢竟の理　義用、最も幽真なり

三に相と者は、所謂（※朱右肩注「法相」）、摩訶梅多羅冒地薩（※原文は異体字）怛嚩の三摩地門、是れ也。是故空中無色より無意識界に至るまで（※「まで」「二字朱」、是れ也。大慈の三昧は樂を與うるを以つて宗と爲、因果を示すを誠（※原文は異体字）と爲。相性別論し、唯識、境を遮す。心、只、此れに在り。頌に曰く、
 二我、何れの時にか断つ 三祇に法身を證す 阿陀は是れ識の性なり 幻影は即ち名賓（※原文は異体字）なり
 四に二と者は、唯蘊無我拔業因種、是れ也。是れ即ち二乘三摩地門也。無無明より無老死盡に至るまで、即ち是れ因縁佛の三昧なり。頌に曰く、
 風葉に因縁を知る 輪迴、幾くの年にか覺る 露花に種子を除く 羊鹿、号、相い連なれり
 無苦集滅道、此れ是の一句五字は、即ち依聲得道の三昧なり。頌に曰く、
 白骨に我、何んか在于 青瘀に人、本より無し 吾が師は是れ四念なり（※「なり」「二字朱」） 羅漢、亦、何ぞ虞しまむ
 五に一と者は、阿哩也嚩路枳帝冒地薩怛嚩の三摩地門也。無智というより無所得故に至るまで、是れ也。此の得自性清淨如來は、一道清淨妙蓮不染を以つて、衆生を開示して、其の苦厄を抜く。智は能達を擧げ、得は所證に名づく。既に理智を泯ぜれば、強に一の名を以つてす。法華涅槃等、攝末歸本の教、唯、此の十字に含（※原文は異体字）めり。諸乗の差別、智者、之を察せよ。頌に曰く、
 蓮を觀て自淨を知り 菓を見て心徳を覺る 一道に能所を泯ぜれば 三車、即ち歸黙す
 第三の行人得益分に二有り、人法、是れ也。初めの人に七有り、前の六、後の一なり。乗の差別に隨つて（※「て」「一字朱」、薩埵に異有り。故に又、薩埵に四有り。愚識金智、是れ也。次に又、法に四あり。謂わく、因行證入也。般若は即ち能因（※原文は異体字）能行、無礙離障は即ち入涅槃、能證覺智は即ち證果なり。文の如く思知せよ。頌に曰く、

行人の數は是れ七 重二は彼れ之の法なり 圓寂と菩提と 正依、何事か乏しからむ

第四の摠歸持明分に又三あり、名體用なり。四種の咒明は名を擧げ、眞實不虛は體を指し、能除諸苦は用を顯す。名を擧ぐる中に、初め的是大神咒は聲聞の眞言、二は緣覺の眞言、三は大乗の眞言、四は秘藏の眞言なり。若し通義を以つては、一一の眞言に皆、四の名を具すれども、略して一隅を示す。圓智の人、三即歸一せよ。頌に曰く、

摠持に文義有り 忍咒、悉く持明なり 聲字と人法と 實相とに此の名を具せり

第五の秘藏眞言分に五有り。初めの𑖀𑖄𑖥𑖦𑖧𑖨𑖩𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮𑖯𑖰𑖱𑖲𑖳𑖴𑖵𑖶𑖷𑖸𑖹𑖺𑖻𑖼𑖽𑖾𑗀𑖿𑗁𑗂𑗃𑗄𑗅𑗆𑗇𑗈𑗉𑗊𑗋𑗌𑗍𑗎𑗏𑗐𑗑𑗒𑗓𑗔𑗕𑗖𑗗𑗘𑗙𑗚𑗛𑗜𑗝𑗞𑗟𑗠𑗡𑗢𑗣𑗤𑗥𑗦𑗧𑗨𑗩𑗪𑗫𑗬𑗭𑗮𑗯𑗰𑗱𑗲𑗳𑗴𑗵𑗶𑗷𑗸𑗹𑗺𑗻𑗼𑗽𑗾𑗿𑘀𑘁𑘂𑘃𑘄𑘅𑘆𑘇𑘈𑘉𑘊𑘋𑘌𑘍𑘎𑘏𑘐𑘑𑘒𑘓𑘔𑘕𑘖𑘗𑘘𑘙𑘚𑘛𑘜𑘝𑘞𑘟𑘠𑘡𑘢𑘣𑘤𑘥𑘦𑘧𑘨𑘩𑘪𑘫𑘬𑘭𑘮𑘯𑘰𑘱𑘲𑘳𑘴𑘵𑘶𑘷𑘸𑘹𑘺𑘻𑘼𑘽𑘾𑘿𑙀𑙁𑙂𑙃𑙄𑙅𑙆𑙇𑙈𑙉𑙊𑙋𑙌𑙍𑙎𑙏𑙐𑙑𑙒𑙓𑙔𑙕𑙖𑙗𑙘𑙙𑙚𑙛𑙜𑙝𑙞𑙟𑙠𑙡𑙢𑙣𑙤𑙥𑙦𑙧𑙨𑙩𑙪𑙫𑙬𑙭𑙮𑙯𑙰𑙱𑙲𑙳𑙴𑙵𑙶𑙷𑙸𑙹𑙺𑙻𑙼𑙽𑙾𑙿𑚀𑚁𑚂𑚃𑚄𑚅𑚆𑚇𑚈𑚉𑚊𑚋𑚌𑚍𑚎𑚏𑚐𑚑𑚒𑚓𑚔𑚕𑚖𑚗𑚘𑚙𑚚𑚛𑚜𑚝𑚞𑚟𑚠𑚡𑚢𑚣𑚤𑚥𑚦𑚧𑚨𑚩𑚪𑚫𑚬𑚭𑚮𑚯𑚰𑚱𑚲𑚳𑚴𑚵𑚷𑚶𑚸𑚹𑚺𑚻𑚼𑚽𑚾𑚿𑛀𑛁𑛂𑛃𑛄𑛅𑛆𑛇𑛈𑛉𑛊𑛋𑛌𑛍𑛎𑛏𑛐𑛑𑛒𑛓𑛔𑛕𑛖𑛗𑛘𑛙𑛚𑛛𑛜𑛝𑛞𑛟𑛠𑛡𑛢𑛣𑛤𑛥𑛦𑛧𑛨𑛩𑛪𑛫𑛬𑛭𑛮𑛯𑛰𑛱𑛲𑛳𑛴𑛵𑛶𑛷𑛸𑛹𑛺𑛻𑛼𑛽𑛾𑛿𑜀𑜁𑜂𑜃𑜄𑜅𑜆𑜇𑜈𑜉𑜊𑜋𑜌𑜍𑜎𑜏𑜐𑜑𑜒𑜓𑜔𑜕𑜖𑜗𑜘𑜙𑜚𑜛𑜜𑜝𑜞𑜟𑜠𑜡𑜢𑜣𑜤𑜥𑜦𑜧𑜨𑜩𑜪𑜫𑜬𑜭𑜮𑜯𑜰𑜱𑜲𑜳𑜴𑜵𑜶𑜷𑜸𑜹𑜺𑜻𑜼𑜽𑜾𑜿𑝀𑝁𑝂𑝃𑝄𑝅𑝆𑝇𑝈𑝉𑝊𑝋𑝌𑝍𑝎𑝏𑝐𑝑𑝒𑝓𑝔𑝕𑝖𑝗𑝘𑝙𑝚𑝛𑝜𑝝𑝞𑝟𑝠𑝡𑝢𑝣𑝤𑝥𑝦𑝧𑝨𑝩𑝪𑝫𑝬𑝭𑝮𑝯𑝰𑝱𑝲𑝳𑝴𑝵𑝶𑝷𑝸𑝹𑝺𑝻𑝼𑝽𑝾𑝿𑞀𑞁𑞂𑞃𑞄𑞅𑞆𑞇𑞈𑞉𑞊𑞋𑞌𑞍𑞎𑞏𑞐𑞑𑞒𑞓𑞔𑞕𑞖𑞗𑞘𑞙𑞚𑞛𑞜𑞝𑞞𑞟𑞠𑞡𑞢𑞣𑞤𑞥𑞦𑞧𑞨𑞩𑞪𑞫𑞬𑞭𑞮𑞯𑞰𑞱𑞲𑞳𑞴𑞵𑞶𑞷𑞸𑞹𑞺𑞻𑞼𑞽𑞾𑞿𑟀𑟁𑟂𑟃𑟄𑟅𑟆𑟇𑟈𑟉𑟊𑟋𑟌𑟍𑟎𑟏𑟐𑟑𑟒𑟓𑟔𑟕𑟖𑟗𑟘𑟙𑟚𑟛𑟜𑟝𑟞𑟟𑟠𑟡𑟢𑟣𑟤𑟥𑟦𑟧𑟨𑟩𑟪𑟫𑟬𑟭𑟮𑟯𑟰𑟱𑟲𑟳𑟴𑟵𑟶𑟷𑟸𑟹𑟺𑟻𑟼𑟽𑟾𑟿𑠀𑠁𑠂𑠃𑠄𑠅𑠆𑠇𑠈𑠉𑠊𑠋𑠌𑠍𑠎𑠏𑠐𑠑𑠒𑠓𑠔𑠕𑠖𑠗𑠘𑠙𑠚𑠛𑠜𑠝𑠞𑠟𑠠𑠡𑠢𑠣𑠤𑠥𑠦𑠧𑠨𑠩𑠪𑠫𑠬𑠭𑠮𑠯𑠰𑠱𑠲𑠳𑠴𑠵𑠶𑠷𑠸𑠺𑠹𑠻𑠼𑠽𑠾𑠿𑡀𑡁𑡂𑡃𑡄𑡅𑡆𑡇𑡈𑡉𑡊𑡋𑡌𑡍𑡎𑡏𑡐𑡑𑡒𑡓𑡔𑡕𑡖𑡗𑡘𑡙𑡚𑡛𑡜𑡝𑡞𑡟𑡠𑡡𑡢𑡣𑡤𑡥𑡦𑡧𑡨𑡩𑡪𑡫𑡬𑡭𑡮𑡯𑡰𑡱𑡲𑡳𑡴𑡵𑡶𑡷𑡸𑡹𑡺𑡻𑡼𑡽𑡾𑡿𑢀𑢁𑢂𑢃𑢄𑢅𑢆𑢇𑢈𑢉𑢊𑢋𑢌𑢍𑢎𑢏𑢐𑢑𑢒𑢓𑢔𑢕𑢖𑢗𑢘𑢙𑢚𑢛𑢜𑢝𑢞𑢟𑢠𑢡𑢢𑢣𑢤𑢥𑢦𑢧𑢨𑢩𑢪𑢫𑢬𑢭𑢮𑢯𑢰𑢱𑢲𑢳𑢴𑢵𑢶𑢷𑢸𑢹𑢺𑢻𑢼𑢽𑢾𑢿𑣀𑣁𑣂𑣃𑣄𑣅𑣆𑣇𑣈𑣉𑣊𑣋𑣌𑣍𑣎𑣏𑣐𑣑𑣒𑣓𑣔𑣕𑣖𑣗𑣘𑣙𑣚𑣛𑣜𑣝𑣞𑣟𑣠𑣡𑣢𑣣𑣤𑣥𑣦𑣧𑣨𑣩𑣪𑣫𑣬𑣭𑣮𑣯𑣰𑣱𑣲𑣳𑣴𑣵𑣶𑣷𑣸𑣹𑣺𑣻𑣼𑣽𑣾𑣿𑤀𑤁𑤂𑤃𑤄𑤅𑤆𑤇𑤈𑤉𑤊𑤋𑤌𑤍𑤎𑤏𑤐𑤑𑤒𑤓𑤔𑤕𑤖𑤗𑤘𑤙𑤚𑤛𑤜𑤝𑤞𑤟𑤠𑤡𑤢𑤣𑤤𑤥𑤦𑤧𑤨𑤩𑤪𑤫𑤬𑤭𑤮𑤯𑤰𑤱𑤲𑤳𑤴𑤵𑤶𑤷𑤸𑤹𑤺𑤻𑤼𑤽𑤾𑤿𑥀𑥁𑥂𑥃𑥄𑥅𑥆𑥇𑥈𑥉𑥊𑥋𑥌𑥍𑥎𑥏𑥐𑥑𑥒𑥓𑥔𑥕𑥖𑥗𑥘𑥙𑥚𑥛𑥜𑥝𑥞𑥟𑥠𑥡𑥢𑥣𑥤𑥥𑥦𑥧𑥨𑥩𑥪𑥫𑥬𑥭𑥮𑥯𑥰𑥱𑥲𑥳𑥴𑥵𑥶𑥷𑥸𑥹𑥺𑥻𑥼𑥽𑥾𑥿𑦀𑦁𑦂𑦃𑦄𑦅𑦆𑦇𑦈𑦉𑦊𑦋𑦌𑦍𑦎𑦏𑦐𑦑𑦒𑦓𑦔𑦕𑦖𑦗𑦘𑦙𑦚𑦛𑦜𑦝𑦞𑦟𑦠𑦡𑦢𑦣𑦤𑦥𑦦𑦧𑦨𑦩𑦪𑦫𑦬𑦭𑦮𑦯𑦰𑦱𑦲𑦳𑦴𑦵𑦶𑦷𑦸𑦹𑦺𑦻𑦼𑦽𑦾𑦿𑧀𑧁𑧂𑧃𑧄𑧅𑧆𑧇𑧈𑧉𑧊𑧋𑧌𑧍𑧎𑧏𑧐𑧑𑧒𑧓𑧔𑧕𑧖𑧗𑧘𑧙𑧚𑧛𑧜𑧝𑧞𑧟𑧠𑧡𑧢𑧣𑧤𑧥𑧦𑧧𑧨𑧩𑧪𑧫𑧬𑧭𑧮𑧯𑧰𑧱𑧲𑧳𑧴𑧵𑧶𑧷𑧸𑧹𑧺𑧻𑧼𑧽𑧾𑧿𑨀𑨁𑨂𑨃𑨄𑨅𑨆𑨇𑨈𑨉𑨊𑨋𑨌𑨍𑨎𑨏𑨐𑨑𑨒𑨓𑨔𑨕𑨖𑨗𑨘𑨙𑨚𑨛𑨜𑨝𑨞𑨟𑨠𑨡𑨢𑨣𑨤𑨥𑨦𑨧𑨨𑨩𑨪𑨫𑨬𑨭𑨮𑨯𑨰𑨱𑨲𑨳𑨴𑨵𑨶𑨷𑨸𑨹𑨺𑨻𑨼𑨽𑨾𑨿𑩀𑩁𑩂𑩃𑩄𑩅𑩆𑩇𑩈𑩉𑩊𑩋𑩌𑩍𑩎𑩏𑩐𑩑𑩒𑩓𑩔𑩕𑩖𑩗𑩘𑩙𑩚𑩛𑩜𑩝𑩞𑩟𑩠𑩡𑩢𑩣𑩤𑩥𑩦𑩧𑩨𑩩𑩪𑩫𑩬𑩭𑩮𑩯𑩰𑩱𑩲𑩳𑩴𑩵𑩶𑩷𑩸𑩹𑩺𑩻𑩼𑩽𑩾𑩿𑪀𑪁𑪂𑪃𑪄𑪅𑪆𑪇𑪈𑪉𑪊𑪋𑪌𑪍𑪎𑪏𑪐𑪑𑪒𑪓𑪔𑪕𑪖𑪗𑪘𑪙𑪚𑪛𑪜𑪝𑪞𑪟𑪠𑪡𑪢𑪣𑪤𑪥𑪦𑪧𑪨𑪩𑪪𑪫𑪬𑪭𑪮𑪯𑪰𑪱𑪲𑪳𑪴𑪵𑪶𑪷𑪸𑪹𑪺𑪻𑪼𑪽𑪾𑪿𑫀𑫁𑫂𑫃𑫄𑫅𑫆𑫇𑫈𑫉𑫊𑫋𑫌𑫍𑫎𑫏𑫐𑫑𑫒𑫓𑫔𑫕𑫖𑫗𑫘𑫙𑫚𑫛𑫜𑫝𑫞𑫟𑫠𑫡𑫢𑫣𑫤𑫥𑫦𑫧𑫨𑫩𑫪𑫫𑫬𑫭𑫮𑫯𑫰𑫱𑫲𑫳𑫴𑫵𑫶𑫷𑫸𑫹𑫺𑫻𑫼𑫽𑫾𑫿𑬀𑬁𑬂𑬃𑬄𑬅𑬆𑬇𑬈𑬉𑬊𑬋𑬌𑬍𑬎𑬏𑬐𑬑𑬒𑬓𑬔𑬕𑬖𑬗𑬘𑬙𑬚𑬛𑬜𑬝𑬞𑬟𑬠𑬡𑬢𑬣𑬤𑬥𑬦𑬧𑬨𑬩𑬪𑬫𑬬𑬭𑬮𑬯𑬰𑬱𑬲𑬳𑬴𑬵𑬶𑬷𑬸𑬹𑬺𑬻𑬼𑬽𑬾𑬿𑭀𑭁𑭂𑭃𑭄𑭅𑭆𑭇𑭈𑭉𑭊𑭋𑭌𑭍𑭎𑭏𑭐𑭑𑭒𑭓𑭔𑭕𑭖𑭗𑭘𑭙𑭚𑭛𑭜𑭝𑭞𑭟𑭠𑭡𑭢𑭣𑭤𑭥𑭦𑭧𑭨𑭩𑭪𑭫𑭬𑭭𑭮𑭯𑭰𑭱𑭲𑭳𑭴𑭵𑭶𑭷𑭸𑭹𑭺𑭻𑭼𑭽𑭾𑭿𑮀𑮁𑮂𑮃𑮄𑮅𑮆𑮇𑮈𑮉𑮊𑮋𑮌𑮍𑮎𑮏𑮐𑮑𑮒𑮓𑮔𑮕𑮖𑮗𑮘𑮙𑮚𑮛𑮜𑮝𑮞𑮟𑮠𑮡𑮢𑮣𑮤𑮥𑮦𑮧𑮨𑮩𑮪𑮫𑮬𑮭𑮮𑮯𑮰𑮱𑮲𑮳𑮴𑮵𑮶𑮷𑮸𑮹𑮺𑮻𑮼𑮽𑮾𑮿𑯀𑯁𑯂𑯃𑯄𑯅𑯆𑯇𑯈𑯉𑯊𑯋𑯌𑯍𑯎𑯏𑯐𑯑𑯒𑯓𑯔𑯕𑯖𑯗𑯘𑯙𑯚𑯛𑯜𑯝𑯞𑯟𑯠𑯡𑯢𑯣𑯤𑯥𑯦𑯧𑯨𑯩𑯪𑯫𑯬𑯭𑯮𑯯𑯰𑯱𑯲𑯳𑯴𑯵𑯶𑯷𑯸𑯹𑯺𑯻𑯼𑯽𑯾𑯿𑰀𑰁𑰂𑰃𑰄𑰅𑰆𑰇𑰈𑰉𑰊𑰋𑰌𑰍𑰎𑰏𑰐𑰑𑰒𑰓𑰔𑰕𑰖𑰗𑰘𑰙𑰚𑰛𑰜𑰝𑰞𑰟𑰠𑰡𑰢𑰣𑰤𑰥𑰦𑰧𑰨𑰩𑰪𑰫𑰬𑰭𑰮𑰯𑰰𑰱𑰲𑰳𑰴𑰵𑰶𑰷𑰸𑰹𑰺𑰻𑰼𑰽𑰾𑰿𑱀𑱁𑱂𑱃𑱄𑱅𑱆𑱇𑱈𑱉𑱊𑱋𑱌𑱍𑱎𑱏𑱐𑱑𑱒𑱓𑱔𑱕𑱖𑱗𑱘𑱙𑱚𑱛𑱜𑱝𑱞𑱟𑱠𑱡𑱢𑱣𑱤𑱥𑱦𑱧𑱨𑱩𑱪𑱫𑱬𑱭𑱮𑱯𑱰𑱱𑱲𑱳𑱴𑱵𑱶𑱷𑱸𑱹𑱺𑱻𑱼𑱽𑱾𑱿𑲀𑲁𑲂𑲃𑲄𑲅𑲆𑲇𑲈𑲉𑲊𑲋𑲌𑲍𑲎𑲏𑲐𑲑𑲒𑲓𑲔𑲕𑲖𑲗𑲘𑲙𑲚𑲛𑲜𑲝𑲞𑲟𑲠𑲡𑲢𑲣𑲤𑲥𑲦𑲧𑲨𑲩𑲪𑲫𑲬𑲭𑲮𑲯𑲰𑲱𑲲𑲳𑲴𑲵𑲶𑲷𑲸𑲹𑲺𑲻𑲼𑲽𑲾𑲿𑳀𑳁𑳂𑳃𑳄𑳅𑳆𑳇𑳈𑳉𑳊𑳋𑳌𑳍𑳎𑳏𑳐𑳑𑳒𑳓𑳔𑳕𑳖𑳗𑳘𑳙𑳚𑳛𑳜𑳝𑳞𑳟𑳠𑳡𑳢𑳣𑳤𑳥𑳦𑳧𑳨𑳩𑳪𑳫𑳬𑳭𑳮𑳯𑳰𑳱𑳲𑳳𑳴𑳵𑳶𑳷𑳸𑳹𑳺𑳻𑳼𑳽𑳾𑳿𑴀𑴁𑴂𑴃𑴄𑴅𑴆𑴇𑴈𑴉𑴊𑴋𑴌𑴍𑴎𑴏𑴐𑴑𑴒𑴓𑴔𑴕𑴖𑴗𑴘𑴙𑴚𑴛𑴜𑴝𑴞𑴟𑴠𑴡𑴢𑴣𑴤𑴥𑴦𑴧𑴨𑴩𑴪𑴫𑴬𑴭𑴮𑴯𑴰𑴱𑴲𑴳𑴴𑴵𑴶𑴷𑴸𑴹𑴺𑴻𑴼𑴽𑴾𑴿𑵀𑵁𑵂𑵃𑵄𑵅𑵆𑵇𑵈𑵉𑵊𑵋𑵌𑵍𑵎𑵏𑵐𑵑𑵒𑵓𑵔𑵕𑵖𑵗𑵘𑵙𑵚𑵛𑵜𑵝𑵞𑵟𑵠𑵡𑵢𑵣𑵤𑵥𑵦𑵧𑵨𑵩𑵪𑵫𑵬𑵭𑵮𑵯𑵰𑵱𑵲𑵳𑵴𑵵𑵶𑵷𑵸𑵹𑵺𑵻𑵼𑵽𑵾𑵿𑶀𑶁𑶂𑶃𑶄𑶅𑶆𑶇𑶈𑶉𑶊𑶋𑶌𑶍𑶎𑶏𑶐𑶑𑶒𑶓𑶔𑶕𑶖𑶗𑶘𑶙𑶚𑶛𑶜𑶝𑶞𑶟𑶠𑶡𑶢𑶣𑶤𑶥𑶦𑶧𑶨𑶩𑶪𑶫𑶬𑶭𑶮𑶯𑶰𑶱𑶲𑶳𑶴𑶵𑶶𑶷𑶸𑶹𑶺𑶻𑶼𑶽𑶾𑶿𑷀𑷁𑷂𑷃𑷄𑷅𑷆𑷇𑷈𑷉𑷊𑷋𑷌𑷍𑷎𑷏𑷐𑷑𑷒𑷓𑷔𑷕𑷖𑷗𑷘𑷙𑷚𑷛𑷜𑷝𑷞𑷟𑷠𑷡𑷢𑷣𑷤𑷥𑷦𑷧𑷨𑷩𑷪𑷫𑷬𑷭𑷮𑷯𑷰𑷱𑷲𑷳𑷴𑷵𑷶𑷷𑷸𑷹𑷺𑷻𑷼𑷽𑷾𑷿𑸀𑸁𑸂𑸃𑸄𑸅𑸆𑸇𑸈𑸉𑸊𑸋𑸌𑸍𑸎𑸏𑸐𑸑𑸒𑸓𑸔𑸕𑸖𑸗𑸘𑸙𑸚𑸛𑸜𑸝𑸞𑸟𑸠𑸡𑸢𑸣𑸤𑸥𑸦𑸧𑸨𑸩𑸪𑸫𑸬𑸭𑸮𑸯𑸰𑸱𑸲𑸳𑸴𑸵𑸶𑸷𑸸𑸹𑸺𑸻𑸼𑸽𑸾𑸿𑹀𑹁𑹂𑹃𑹄𑹅𑹆𑹇𑹈𑹉𑹊𑹋𑹌𑹍𑹎𑹏𑹐𑹑𑹒𑹓𑹔𑹕𑹖𑹗𑹘𑹙𑹚𑹛𑹜𑹝𑹞𑹟𑹠𑹡𑹢𑹣𑹤𑹥𑹦𑹧𑹨𑹩𑹪𑹫𑹬𑹭𑹮𑹯𑹰𑹱𑹲𑹳𑹴𑹵𑹶𑹷𑹸𑹹𑹺𑹻𑹼𑹽𑹾𑹿𑺀𑺁𑺂𑺃𑺄𑺅𑺆𑺇𑺈𑺉𑺊𑺋𑺌𑺍𑺎𑺏𑺐𑺑𑺒𑺓𑺔𑺕𑺖𑺗𑺘𑺙𑺚𑺛𑺜𑺝𑺞𑺟𑺠𑺡𑺢𑺣𑺤𑺥𑺦𑺧𑺨𑺩𑺪𑺫𑺬𑺭𑺮𑺯𑺰𑺱𑺲𑺳𑺴𑺵𑺶𑺷𑺸𑺹𑺺𑺻𑺼𑺽𑺾𑺿𑻀𑻁𑻂𑻃𑻄𑻅𑻆𑻇𑻈𑻉𑻊𑻋𑻌𑻍𑻎𑻏𑻐𑻑𑻒𑻓𑻔𑻕𑻖𑻗𑻘𑻙𑻚𑻛𑻜𑻝𑻞𑻟𑻠𑻡𑻢𑻣𑻤𑻥𑻦𑻧𑻨𑻩𑻪𑻫𑻬𑻭𑻮𑻯𑻰𑻱𑻲𑻳𑻴𑻵𑻶𑻷𑻸𑻹𑻺𑻻𑻼𑻽𑻾𑻿𑼀𑼁𑼂𑼃𑼄𑼅𑼆𑼇𑼈𑼉𑼊𑼋𑼌𑼍𑼎𑼏𑼐𑼑𑼒𑼓𑼔𑼕𑼖𑼗𑼘𑼙𑼚𑼛𑼜𑼝𑼞𑼟𑼠𑼡𑼢𑼣𑼤𑼥𑼦𑼧𑼨𑼩𑼪𑼫𑼬𑼭𑼮𑼯𑼰𑼱𑼲𑼳𑼴𑼵𑼶𑼷𑼸𑼹𑼺𑼻𑼼𑼽𑼾𑼿𑽀𑽁𑽂𑽃𑽄𑽅𑽆𑽇𑽈𑽉𑽊𑽋𑽌𑽍𑽎𑽏𑽐𑽑𑽒𑽓𑽔𑽕𑽖𑽗𑽘𑽙𑽚𑽛𑽜𑽝𑽞𑽟𑽠𑽡𑽢𑽣𑽤𑽥𑽦𑽧𑽨𑽩𑽪𑽫𑽬𑽭𑽮𑽯𑽰𑽱𑽲𑽳𑽴𑽵𑽶𑽷𑽸𑽹𑽺𑽻𑽼𑽽𑽾𑽿𑾀𑾁𑾂𑾃𑾄𑾅𑾆𑾇𑾈𑾉𑾊𑾋𑾌𑾍𑾎𑾏𑾐𑾑𑾒𑾓𑾔𑾕𑾖𑾗𑾘𑾙𑾚𑾛𑾜𑾝𑾞𑾟𑾠𑾡𑾢𑾣𑾤𑾥𑾦𑾧𑾨𑾩𑾪𑾫𑾬𑾭𑾮𑾯𑾰𑾱𑾲𑾳𑾴𑾵𑾶𑾷𑾸𑾹𑾺𑾻𑾼𑾽𑾾𑾿𑿀𑿁𑿂𑿃𑿄𑿅𑿆𑿇𑿈𑿉𑿊𑿋𑿌𑿍𑿎𑿏𑿐𑿑𑿒𑿓𑿔𑿕𑿖𑿗𑿘𑿙𑿚𑿛𑿜𑿝𑿞𑿟𑿠𑿡𑿢𑿣𑿤𑿥𑿦𑿧𑿨𑿩𑿪𑿫𑿬𑿭𑿮𑿯𑿰𑿱𑿲𑿳𑿴𑿵𑿶𑿷𑿸𑿹𑿺𑿻𑿼𑿽𑿾𑿿𑀀𑀁𑀂𑀃𑀄𑀅𑀆𑀇𑀈𑀉𑀊𑀋𑀌𑀍𑀎𑀏𑀐𑀑𑀒𑀓𑀔𑀕𑀖𑀗𑀘𑀙𑀚𑀛𑀜𑀝𑀞𑀟𑀠𑀡𑀢𑀣𑀤𑀥𑀦𑀧𑀨𑀩𑀪𑀫𑀬𑀭𑀮𑀯𑀰𑀱𑀲𑀳𑀴𑀵𑀶𑀷𑀸𑀹𑀺𑀻𑀼𑀽𑀾𑀿𑁀𑁁𑁂𑁃𑁄𑁅𑁆𑁇𑁈𑁉𑁊𑁋𑁌𑁍𑁎𑁏𑁐𑁑𑁒𑁓𑁔𑁕𑁖𑁗𑁘𑁙𑁚𑁛𑁜𑁝𑁞𑁟𑁠𑁡𑁢𑁣𑁤𑁥𑁦𑁧𑁨𑁩𑁪𑁫𑁬𑁭𑁮𑁯𑁰𑁱𑁲𑁳𑁴𑁵𑁶𑁷𑁸𑁹𑁺𑁻𑁼𑁽𑁾𑁿𑂀𑂁𑂂𑂃𑂄𑂅𑂆𑂇𑂈𑂉𑂊𑂋𑂌𑂍𑂎𑂏𑂐𑂑𑂒𑂓𑂔𑂕𑂖𑂗𑂘𑂙𑂚𑂛𑂜𑂝𑂞𑂟𑂠𑂡𑂢𑂣𑂤𑂥𑂦𑂧𑂨𑂩𑂪𑂫𑂬𑂭𑂮𑂯𑂰𑂱𑂲𑂳𑂴𑂵𑂶𑂷𑂸𑂺𑂹𑂻𑂼𑂽𑂾𑂿𑃀𑃁𑃂𑃃𑃄𑃅𑃆𑃇𑃈𑃉𑃊𑃋𑃌𑃍𑃎𑃏𑃐𑃑𑃒𑃓𑃔𑃕𑃖𑃗𑃘𑃙𑃚𑃛𑃜𑃝𑃞𑃟𑃠𑃡𑃢𑃣𑃤𑃥𑃦𑃧𑃨𑃩𑃪𑃫𑃬𑃭𑃮𑃯𑃰𑃱𑃲𑃳𑃴𑃵𑃶𑃷𑃸𑃹𑃺𑃻𑃼𑃽𑃾𑃿𑄀𑄁𑄂𑄃𑄄𑄅𑄆𑄇𑄈𑄉𑄊𑄋𑄌𑄍𑄎𑄏𑄐𑄑𑄒𑄓𑄔𑄕𑄖𑄗𑄘𑄙𑄚𑄛𑄜𑄝𑄞𑄟𑄠𑄡𑄢𑄣𑄤𑄥𑄦𑄧𑄨𑄩𑄪𑄫𑄬𑄭𑄮𑄯𑄰𑄱𑄲𑄳𑄴𑄵𑄶𑄷𑄸𑄹𑄺𑄻𑄼𑄽𑄾𑄿𑅀𑅁𑅂𑅃𑅄𑅅𑅆𑅇𑅈𑅉𑅊𑅋𑅌𑅍𑅎𑅏𑅐𑅑𑅒𑅓

り。此れ秘が中の極秘なり。應化の釋迦、給孤園に在して、菩薩天人の爲に、畫像壇法眞言手印等を説きたまう。亦、是れ秘密なり。陀羅尼集經第三卷、是れなり。顯密は人に在り。聲字は即ち非なり。然も猶お、顯が中の秘、秘中の極秘なり。淺深重重なる耳。

我、秘密眞言義に依つて 略して心經五分の文を讚ず

一字一文、法界に遍じ 無終無始にして、我が心分なり

翳眼エイの衆生は盲（※原文は異体字）して見ず 曼（※原文は異体字）儒般若、能く紛を解く

斯の甘露を灑いで、迷者を霑す 同じく無明を断じて魔軍を破せん

般若心經秘鍵

時に弘仁九年の春に天下大疫エキす。爰に帝皇クワウ自ら、黄金を筆端に染め、紺紙を爪掌セウに握にぎつて（※左訓不詳）、般若心經一卷を書寫し奉る。予、講讀の撰に範のりて、經旨の宗を綴つづる。未だ結願の詞を吐かざるに、蘇生やからの族、途に于たむ。夜、變じて、日光、赫赫たり。是れ愚身が戒徳に非ず、金輪御信力の所爲也。但し神舎まのあたに詣まのあた（※原文は異体字）せん輩（※原文は異体字）は、此の秘鍵を誦じ奉るべし。昔、予、鷲峯説法の筵に陪まのあたつて、親まのあたり是の深文を聞きき。豈あに、其の義に達せざらんや而已み。

入唐沙門空海上表

（文責・編集、元密教文化研究所事務室長兼専門員、甲田博史）

〈キーワード〉般若心經秘鍵、高野版、空海

15 鎌倉時代刊本『般若心經秘鍵』（甲田）





般若心經秘鍵 并序

遍照金剛撰

文殊利劍絕諸戲

覺母梵文調御師

◎^チ又^ト真言為種子

含藏諸教陀羅尼

無邊生死何能斷

唯有禪那正思惟

尊者三摩仁不讓

我今讚述垂哀慈

夫佛法非遙心中即近真如非外弃身何求

迷悟在我則發心即到明暗非他則信修忽
證衰我衰我長眠子苦我痛我狂醉入痛狂
哭不醉酷睡朝覺者不曾訪醫王之藥何時
見大日之光至若墜墮輕重覺悟遲速穢根
不同性歎即異遂使二嚴殊轉分手金蓮之
場五乘並鑣疏蹄幻影之埒隨其解毒得藥

即別慈父導子之方大經在此乎

大般若波羅蜜多心經者即是大般若菩薩

大心真言三摩地法門文欠一紙行即十四

可謂簡而要約而深五藏般若薰一句而不

飽七宗行果歎一行而不足觀在薩埵則舉

諸乘之行入度苦涅槃則褰諸蔽之得樂五

蘊橫指迷境三佛豎示悟心言色空則普賢
 解頤圓融之義談不生則支殊破顏絕戲之
 觀說之識界簡持拍手泯之境智歸一快心
 十二目緣指生滅於麟角四諦法輪驚普空
 於羊車況復凡下二字吞諸歲之行果互禮
 兩言孕顯密之法教一一聲字歷劫之談不

盡一一名實塵滿之佛無極是故誦持講供
則拔苦與樂修習思惟則得道起通甚深之
稱誠宜可然余教童之次聊撮經要釋彼五
分釋家雖多未鈞此幽翻譯同異顯密差別
並如後釋或問云般若第二未了之教何能
吞三顯之經如來說法一字含五乘之義一

念說三藏之法何沉一部一品何匱何無龜
卦爻著含萬象而無盡帝網聲論吞諸義而
不窮難者曰若然前來法匠何不吐斯言答
聖人投藥隨機深淺賢者說默待時待人吾
未知蓋可言不言不言不言言之失智
又斷而已

佛說摩訶般若波羅蜜多心經者就此題額
 有二別梵漢別故今謂佛說摩訶般若波羅
 蜜多心經者胡漢雜舉說心經三字漢者餘
 九字胡者若身梵者曰

摩訶般若波羅蜜多心經
 其方初二字圓滿意者之名次二字開語

密藏施甘露之稱次二字就大多悲立義次
二字約之慧樹名次三就所作已難為号次
二槐^ニ中表義次二以貫線攝^ニ待^ニ等顯字若
以德義說皆具入法前斯則大般若波羅密
多菩薩之名即是入此菩薩具法且念羅真
言三摩地門一一字即法此一一名皆以世

間淺名表法性深号即是喻此三摩地門佛
在鷲峯山為執事等說之此經數翻譯第一
羅什三藏譯今所說本是次唐遍覺三藏翻
題無佛訖摩訶四字五蘊下加等字遠離下
除一切字陀羅尼後無功能次大周義淨三
藏本題省摩訶字真言後加功能又法月及

般若兩三藏翻並有序分流通又陀羅尼集
經第三卷說此真言法經題與羅什同言般
若心者此菩薩有身心華陀羅尼是經真言
即大心咒依此心真言得般若心名或云略
出大般若經心要故名心不是別會說之所
謂如有龍之蛇鱗此經總有五分第一入法

總通分觀自在。至度一切苦厄。是第二分別
諸業分。色不異空。至無所得。故是第三行人
得益分。喜提薩埵。至三藐三菩提。是也。第四
總歸行明分。故知般若。至真實不虛。是也。第五
秘藏。真言。不可不行。不可不聖。不可不覺。是也。第一
入法總通分。有五因行證入時。是也。言觀自

在能行人即此人本覺菩提為因深般若能
所觀法即是行照空則能證智度苦則所得
果果即入也依彼散入智無量依智差別時
亦多三生三劫六十百妄執差別是名時頌

曰

觀入修智慧深照五衆空
歷劫修念者離煩一心通

第二分別諸乘分亦五達絕相二一是也
初達者所謂達立如來三摩地門是色不異
空至亦復如是是也達立如來即普賢菩薩
秘号普賢圓因以圓融三法為宗故以名之
又是一切如來菩提心行願之身頌曰
色空本不二事理元來同無礙融三種金求喻其宗

二絕者所謂無戲論如來三摩地門是也。是
 諸法空相至不增不減是言無戲論如來即
 文殊菩薩密号文殊利能攝八不絕彼妄
 執之心。平是故以名頌曰。

八不絕諸戲。文殊是無戲人。獨空真竟理。義用是來絕真。
 三相者所謂摩訶梅多羅。冒地薩。但。三摩。

地門是也是故空中無色至無意識界是也
大慈三昧以與樂為宗亦因果為誠相性別
論唯識遠境心只在此平頌曰

二我何時斷 三祇證法身 一阿陀是識性 幻影即名實
四二者唯蘊無我拔業因種是也 是即二乘
三摩地門也 無無明至無老死盡即是因緣

佛之三昧頌曰

風葉知因緣 輪迴覺幾年 露花除種子 羊鹿号相連
無苦集滅道 此是一句五字 即依聲得道之

三昧頌曰

白骨我何在 青瘵人本無 吾師是四念 羅漢亦何虞
五一者阿哩也 藥路 祝帝 冒地 薩担 藥之三

摩地門也無智至無所得故是也此得自性
 清淨如來以一道清淨妙蓮不染開示衆生
 拔其苦厄智舉能達得名所證既派理智強
 以一名法華涅槃無漏未歸本聚唯含此十
 字諸乘差別智者察之頌曰
 觀蓮知自淨見真覺心德一道派能所三三即歸然

第三行人得益分有二入法是也初人有七
前六後一隨乘差別菩薩地有異故又菩薩地有
四愚識金智是也次入法四謂日行證入也
般若即能日行無礙離障即入三摩耶證
覺智即證果如文思知頌曰
行人數是七重二微之法圓寂將三穩正依何事之

第四、總歸持明分又三名體用四種、元明舉
名真實不虛、指體能除諸苦、顯用舉名中初
是大神咒、聲聞真言二、緣覺真言三、大乘真
言四、秘藏真言、若以通義一、真言皆具四
名、略示一隅、圓智之人三、即歸一、頌曰、
總持有文義、忍死來持明、聲字與入法、實相具此名、

第五秘藏真言分有五初引不顯聲聞行果
 二引不舉緣覺行果三引引不指諸大乘最
 勝行果四引引不引直言真身茶羅具足輪
 圓行果五引引不引上諸乘究竟甚畏證
 入義句義如是若約字相義等釋之有無量
 入法華義虛切難盡若要聞者依法更問

曰

真言不思議 觀誦無朋除 一字含不理 即身證法如
 行行至圓寂 去去入原初 三界如家舍 一心是本居
 問陀羅尼是如來秘密語 所以古三意諸師
 家皆閉口絕筆 今作此釋 深背聖旨 如來說
 法有二種 一顯二密 為顯機說 多名為顯

根說。惚待字。是故。如來自說。天字。地字。等。種
種義。是則為秘機。作此說。龍益無異。廣指等
亦說其義。能不之間。在教機耳。說之。默之。並
契佛意。問顯密二教。其旨。天懸。今此顯經中
說秘義。不可醫王之目。觸途皆藥。解寶之人
研石見寶。知與不知。何誰罪過。又此尊真言

儀軌觀法佛金剛頂中說此秘中極秘應化
釋迦在給孤園為菩薩天久說畫像壇法真
言手印等亦是秘密陀羅尼集經第三卷是
顯密在入聲字即非然猶顯中之秘秘中極
秘淺深重重耳

我係秘密真言義

略讚心經五分文

リヤリ

般若心經秘鍵

一字一文遍法界
翳眼衆生盲不見
灑斯甘露常迷者

無終無始我心分
無孺般若能解紛
同斷無明破魔軍

于時弘仁九年春天下大疫^{キス}帝皇自^{クワ}深黃
金於筆端握紺紙於血掌奉書寫般若心經
一卷予範誦讀之撰綴經旨之宗未吐結願
詞獲生族于途夜變而日允赫赫是非愚身
戒德金輪御信力所爲也但誦神舍^{シラハ}董奉誦
此秘鍵昔予陪^シ鷲峯說法之途親聞是深文

豈不達其義而已

入唐沙門空海上表

3

徳富蘇峯氏亦高野版

般若心經一帖ヲ藏ス本書

ト同ジノ兩面摺六行十七字

刊本ナリ、徳富本、奥書三行

奉施入

増權現之威光酬大師之遺恩

為遂現當願望謹開永代摸板云

永和四年秋霜月日 金剛賣狀成書

檀那大教

此本奥書、元應元年、徳富六本ヨリモ

更ラニ五十九年古シ

昭和十年六月十七日記之 京都帝國大學教授清野謙次

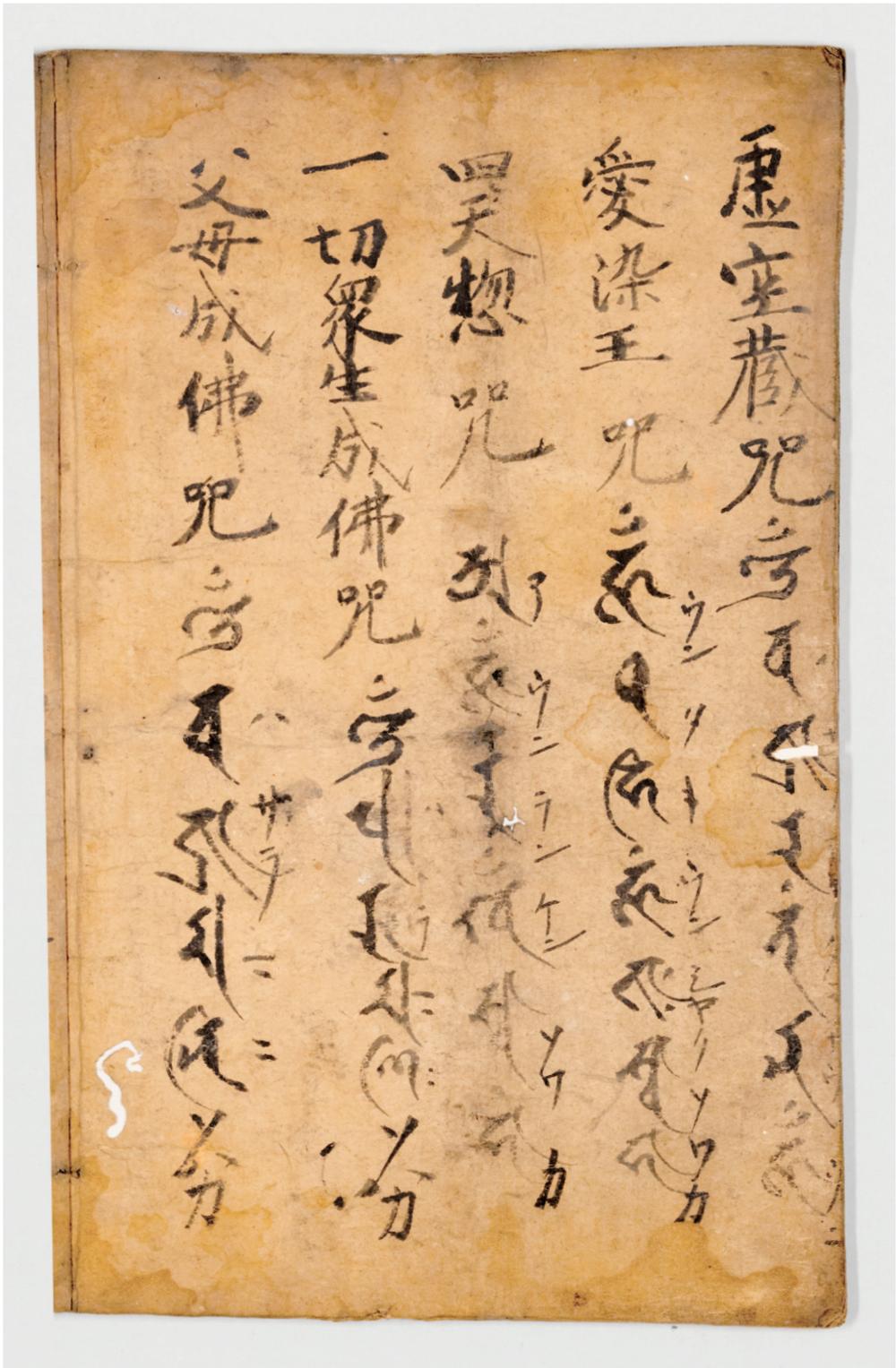
元應元年六月九

於之聖山賣權現一冊

高野山

於之

傳願金剛佛子十範



虚空藏咒

愛染王咒

哭惣咒

一切衆生成佛咒

父母成佛咒

